

【研究論文】

実社会の課題に向き合う宗教者の「修養」

人間環境大学 田中ももの、小谷博光

要 旨

不安の多い現代において、人と人をつなぐ存在が求められている。本研究では、社会的活動を行う浄土宗僧侶のモチベーション調査と文献調査を通じて、社会問題に対して宗教者が果たす役割について分析・考察を行った。その結果、宗教者は人々が集うことのできる場所や機会、人脈の提供、相談相手となることで、支援者と被支援者、協働者同士をつなぐ仲介者としての役割を果たしていることが明らかになった。さらに、活動関係者の中心人物として宗教者は、コミュニティの形成を主導し、その後の活動の広がりや深化にも強い影響を与えた。

1. 現代の「無縁社会」と宗教

私たちが生きている現代は、不安が多い社会だと言われることが多い。現代社会の不安についての一要因には、コミュニティの希薄化が考えられる。NHKは2010年から3回にわたり、特別番組「無縁社会」を放送した。1998年から2011年までの14年間で毎年、年間自殺者が3万人以上となり、孤独死が急増した当時、絆を失った社会の在り方を問い直すことをテーマとした番組であった。現在も依然として自殺者数は減少の兆しが見られず、その他、貧富の格差、子どもの貧困、社会的孤立などの問題が山積している。このような時勢を鑑み、近年、コミュニティに関する研究が多く行われ、人的ネットワークやソーシャル・キャピタル^{注①}、つまり人と人をつなぐ存在が重要だと考えられるようになってきた。

なかでも、本研究にて筆者が着目したのは、宗教者が果たす役割である。紀元前から世界各国で発祥し、広がりを見せた宗教は、多くの地域で経済・政治・法律・社会生活など社会の中核を担っていた¹⁾。近代化とともに宗教は世俗化が進み、日本でも「宗教離れ」が広がっているが、現在でも日本には、352,957人の僧侶(外国人僧侶576人を除く)、76,746軒の仏教寺院が存在している(2020年12月31日)²⁾。近年、一部の僧侶たちの中には、かつて僧侶や寺院が担ってきた社会的役割を新たに実践しようという「社会参加仏教」^{注②}と呼ばれる流れがある。宗教社会学の分野においても、「まさに今、宗教者の役割が問われている」³⁾との指摘や、「2000年以降、日本の仏教界には大きなうねりが起こっている」⁴⁾という声が挙がっている。

「社会参加仏教」の背景には、現代の「無縁社会」に対して危機感や使命感を感じ、実社会に生きる人々と現実的な関わりを持ち、人と人の縁を繋ごうと奮闘している宗教者の存在があるのではないかと筆者は考える。宗教と社会の関わりを論ずる研究は多く見られるが、日本において社会的活動^{注③}を行う僧侶のモチベーションや役割を調査したものは少ない。そこで本研究は、現代の日本において社会的活動を行う宗教者の活動に対するモチベーションを調査することにより、宗教者がコミュニティ形成において中心的役割を担っているかを検証する。

2. 調査手法と調査対象の選定

本研究の目的は、日本において社会的活動を行う宗教者が、どのようなモチベーションを持って活動を行っているかを調査し、宗教者がコミュニティ形成において中心的役割を担っている

という仮説を検証することにある。

現在、日本では、仏教が広く普及しており、日本の仏教宗派のなかでも特に浄土宗は、社会的活動を行う宗派と評価されている^{注(4)}。そこで本研究では、日本の浄土宗に属する僧侶、寺院を調査対象とした。書籍やメディア等で取り上げられたことのある社会的活動を行う浄土宗の僧侶、寺院のうち、調査協力に応じていただいた4つの事例を取り上げる。調査は、2021年7月～11月の期間に実施し、半構造化インタビューおよび文献調査を行った。

3. 調査結果

本章では、各調査対象者から得られた調査結果を示す。なお、個人情報保護のために本稿では、全ての個人名、寺院名、団体名を仮名にて表記する。

(1) 事例：路上生活者支援を行う「団体A」

「団体A」は、路上生活者・外国籍労働者・被災者などの社会的弱者への支援を中心に活動を行う、浄土宗僧侶によって構成された団体である。主な活動としては、全国の寺院や支援団体などから集まったお米でおにぎりを作り、ボランティアと路上生活者のもとへ徒歩で届けに行く「夜回り」をすることである。

a) 路上生活者が持つ背景と共同墓に対するニーズ

団体Aは、東京都市部にて、2000年代に発足した。生活困窮者支援NPOより、路上生活者の共同墓を作ってほしいとの声掛けをきっかけに、僧侶であるKさんが、葬送支援を担う僧侶仲間を組織し、共同墓を建立したのが始まりとなった。Kさんは、この共同墓に向けられたニーズに関して、「葬送という人生最後のステージにおいて人としての尊厳をもって(路上生活者を)見送りたいという支援者(生活困窮支援NPO)と、すでに旅立った仲間を思い、自身も同様に扱われるという不安を抱えた被支援者(路上生活者たち)によって発されたもの」だという。

団体Aが活動を中心に行っている地域は、戦後から高度経済成長期にかけて日雇い労働市場が見られた地区であり、現在も路上生活者が多い。団体Aが発足した当初、路上生活者の人数は最多となっていた。近年、路上生活者は減少傾向にある一方、高齢化が進んでいる。

Kさんは、現在の多くの路上生活者について、高度経済成長期に土木・建築・港湾荷役作業に従事していたかつての日雇い労働者たちであり、彼らが高齢になりつつあると推測した。

路上生活者たちが路上生活に至る背景には様々なものがあり、「精神障害やアルコール中毒… 家族関係のトラブル」⁵⁾、「仕事が減った」、「倒産や失業」⁶⁾などがあると議論されている。これについてKさんは、「誰だって好きこのんで路上生活をしようと思ったわけではないのである。まして、最期を路上で迎えねばならないことや、誰とも関わりを持つこともなく、一人ひっそりと死んでいくことを本心から望むものなどいないであろう」と語っている。

b) 多くの互助関係と「修養」の共有

Kさんは、路上生活者たちから学びや気づきを得ることが多く、団体Aの活動を通し、この学びを僧侶仲間や一般ボランティアにも共有したいと思ったという。Kさんは路上生活者支援による学びについて、大きく4つの内容を挙げた。(1)路上生活者の苦しみを聞くことで苦しみを自分事として捉える、(2)人は生まれたら死んでいかなければならないということ自分事として捉える、(3)すべてのものは繋がっていて、私たちはたくさんの恩恵を受けて生きているという「縁起」「因果」を実感する、(4)自分が無意識に差別をしまっていることに気づき、

また、路上生活者も自分と変わらないことを知ることで、差別を克服する、という4点である。Kさんは、これらの学びのための活動は「修養」^{注⑤}であると考えている。

支援者と被支援者の関係性ははっきり分離されておらず、団体Aの活動には、多くの互助関係が見受けられる(図1参照)。前述の通り、僧侶や一般ボランティアが路上生活者におにぎりを与えることもあれば、路上生活者から学びを得ることもあり、修養のフィールドや人間関係を作る機会になっている。外国籍労働者に対する支援活動も行っている団体Aだが、過去に支援を受けた在日外国人や地域の外国人が、日本の路上生活者支援活動に参加するという例もあり、これは互助関係を象徴していると言える。



図1 団体Aにおける互助関係
出典：インタビュー調査を基に筆者作成

c) 社会的弱者に対する緊急支援とそれを支える仏教思想

インタビューの中でKさんは、生活保護支給を阻むための役所による水際作戦、メディアによるネガティブ・キャンペーン、外国人技能実習制度の不完全さなど、社会的弱者の苦しい立場を語った。Kさんは、マジョリティを対象とした政策や社会動向が社会的弱者に負わせるしわ寄せに対し、アンテナを張っているようだった。団体Aでは、彼らに対して「緊急支援」を行っている。社会的弱者は社会のしわ寄せを負うと同時に貧困状態であることが多いため、団体Aではこれを緩和させるための緊急支援を行っている。

さらに、僧侶ならではの仏教的な物事の視点が、行政・法制・一般論では救うことができない社会的弱者の救済に役立っていると考えられる。仏教では、善・悪を決めつけない。例えば、罪を犯した人に対して、その原因は何か、責任はどこにあるかと追及することが一般的である。しかし仏教的な視点では、そこに文化的・構造的な暴力はなかったかを考慮し、しかもその原因は現世にあるとは限らないと考える。自己責任論が横行する現代社会において、社会的弱者を更に弱い立場に追いやってしまうという風潮があるが、仏教思想を持つ僧侶を中心に組織された団体Aはこれに反しているため、路上生活者などの社会的弱者は、団体Aに対し頼りやすさを感じているのではないだろうか。また、「夜回り」活動中は、僧侶であることを認知してもらうため、参加者一同で作業衣をユニフォーム代わりに着用している。これは、人々が僧侶に寄せている信頼や安心感を感じているからだろう。Kさんは「世間からの漠然とした信頼がお坊さんにある」と語っており、特に路上生活者は僧侶に対して開放的で、「胸を開いて我々を迎えてくれる」という。これは、善・悪を決めつけない仏教思想とそれによる言動や、仏教の長い歴史が積み重ねた信頼によるものかもしれない。

d) 修養の実践による活動の広がり

多数の関係者の互助関係によって成り立っている団体Aであるが、この背景には、僧侶を中心に、路上生活者支援という形の修養が、地域・世代・僧侶・在家を越えて多くの人に共有されたという構造が考えられる。修養の形は路上生活者支援や現場参加に限らないため、誰でも修養を実践することが可能であり、これを多くの人にも実践してほしいとKさんは語った。また、団体Aの一般参加者の中から新しい活動をスタートさせる構想が挙げられていることや、代表者が創設者Kさんから他県の若手僧侶に引き継がれていることなどから、団体Aの活動は、今後も広く進展していくと考えられる。

(2) 事例：人と人を結び付ける支援を行う「寺院B」

浄土宗寺院「寺院B」では、開かれたスペースとして積極的に寺院を活用している。現在これを切り盛りしているのは、前項同様、住職のKさんである。

寺院Bでは2010年代、寺院の一角に「こどもスペース(仮名)」と呼ばれる、主に子どもを対象とした支援活動を行うための施設を開設し、この施設を地域のNPOや有志の方々に提供することで、様々な活動が行われている。地域の子ども支援NPOは、無償学習支援や子ども食堂を開き、また、殺傷事件で娘を亡くされたご遺族は、グリーフケアライブラリーを開き、同じ境遇の方々と語り合うことでグリーフケアを行っている。

また、寺院B本堂では、定期的に「修養会」を開催している。寺院Bでの修養会は、茶話会・写経・念仏会を行うものである。誰でも参加できるこの修養会では、参加者全員で念仏を唱え、説法を聞くことで、自分と仏様にだけ目(心)を向け、非日常の時間・空間を過ごす。この時間を同じ参加者と共有し、語り合うことを楽しみにしている方も多いという。

a) 寺院が本来果たしてきた役割の再興

日本では江戸時代に多くの寺院が創建され、当時、学習支援(寺子屋)、戸籍管理、相談所、集会所などの役割を担っていた。さらに、Kさんによれば、かつては修養会が多くの寺院で開催されており、修養を实践する場所と機会を寺院が提供していた。しかし、現在では、ほとんどの寺院で修養会は行われておらず、寺院は人と人を結びつける役割を失いつつある。Kさんは寺院Bにおいて、「人の役に立ちたい」人のために、人と人をつなぐ場として寺院を活用し、定期的に修養会を開催している。Kさんのモチベーションには、寺院が本来果たしてきた役割を再興したいという想いがあると推察できる。

このような寺院の活用は、地域内の人と人のつながりを強めているように思われる。寺院B本堂に隣接する「こどもスペース」では、開設当初から今日に至るまで、地域の子ども支援NPOによって、無償学習支援や子ども食堂やフードパントリーが営まれている。寺院Bが位置する地域には、ひとり親世帯や、親が障害を持っているために子育てができないケース、子どもの居場所がないなど、子育てに関する問題が多いという。その地域ならではの子育てに関する問題に対し、地域の中で支援が行われるという構造が見受けられる。

b) 人の心を豊かに耕すという僧侶の役割

寺院Bでは連日活動が営まれているが、Kさん自身は直接的に働いているわけではないという。あくまで、人々が集うことのできる機会と場所を提供・支援し、人の心を豊かに耕すという僧侶の役割を实践している。Kさんは、「働かない生産性を持たないお坊さん達だからこそ、働き続けることでギスギスしたりとか辛くなっていく人たちのことを丁寧に俯瞰することもできるし、彼らの生活する時間とは異なる時間を生きていく人たち(僧侶)であればこそ、本当に心を穏やかに話を聴くこともできるのじゃないだろうか」と、現代においても生産性を持たない僧侶が必要とされる理由を示唆した。「修養会」は、僧侶が持つ非日常の時間・空間を一般の人に共有する機会となっているだろう。Kさんは一般の方からのニーズの大きさも感じており、「ここなら相談できるよっていう表示をする」ことが大切だという。

以上のような支援活動は、寺院以外の施設でも担うことは可能かもしれない。しかし、寺院Bでの活動は、僧侶や寺院に特有の非日常の時間・空間を提供している点が特徴的であり、寺院のスペース提供や、僧侶による人と人を結びつける支援は有意義であると思われる。

(3) 事例：児童養護施設を営む「社会福祉法人C会」

「社会福祉法人C会」は、児童養護施設や保育園などを営んでいる。1940年代(戦後)、浄土宗寺院において、住職Lさん(故人)が、戦災孤児を里子として引き取ったことで始まった。以来70年以上、活動は続けられている。現在、Lさんの長男Mさんが寺院の住職、次男Nさんが児童養護施設の施設長を務めていることから、この2人を中心にインタビュー調査を行った。

a) 戦災孤児の里子引き受けと活動の広がり

終戦直後、当該寺院に婿養子としてやってきたLさん(1920年代生まれ)は、僧侶としての職務と並行して、地域の母子寮(現在の母子生活支援施設^{注(6)})に勤めていた。当時、Lさんは、戦災孤児を里子として迎え入れるようになった。戦後、多くの身寄りのない貧しい子どもたちに対して、Lさんが僧侶としての使命感を感じたこと、もしくは、母子寮に勤務していたことによる何らかの繋がり、自身の息子を亡くした喪失感が影響を与えたのではないだろうか。1940年代後半には、法人化により「養護施設開設財団法人C会」を開設し、養護施設(現在の児童養護施設)を設置した。養護施設の児童定員は、設置当初20名だったが、社会福祉法人に改組した年には定員40名、その後定員50人と規模を拡大し、それ以降、虚弱児施設^{注(7)}の設立、養護施設の改築、保育園の設立など、約20年間にわたって規模を拡張し続けた。

LさんがC会を創設した当初、地域の人々はそれを手助けしていた。Nさんによると、「おっさん(創設者Lさん)今度は何をやるだん」と地域の人々が応援してくれたという。C会の分園を作った際の象徴的なエピソードがある。Lさんと親しい沿岸地域のある寺院住職は、「太平洋の潮風を浴びながら心身ともにたくましい子を育てたいんだ」というLさんの思いを受けて土地を譲り、そこに、C会近所の大工さんは「朝4時起きで自転車で建てに行ってくれた」という。「海の家」としてC会の子どもたちが夏の間にごす施設として活躍した後、虚弱児施設、C会分園となった。

b) 受け継がれている仏教性

C会の中心には、創設者Lさんの存在およびLさんによる仏教的な思想があると考えられる。創設者Lさんは、C会の職員や子どもたちから「トウサン」と呼ばれ、親しまれていた。Mさんは「(Lさんには)先を見通す力があつた」と語り、Nさんは「(自分は)お釈迦様(Lさん)の掌の上においた」と振り返った。Lさんが亡くなってから約20年が経過しているが、Lさんの仏教性が受け継がれていると考えられる場面がいくつかあつたため、以下に紹介する。

C会は設立以来、「仏法僧(ぶつぼうそう)あかるく・ただしく・なかよく」を運営理念に掲げている。「仏法僧」とは本来、仏教における3つの宝(三宝)のことを指しているが、浄土宗僧侶の椎尾弁匡は「仏とは一番明るく心の覚めた人であり、法とは正しく生きることであり、僧とは互いに仲よく和合すること」と説いた⁷⁾。これから影響を受けたものと思われる。僧侶ではない次世代の職員たちは、今後もこの理念を受け継いでいく方針を語っている。

また、養護施設では近年まで、子どもたちによる「朝勤行」が行われていた。この朝勤行は、「一掃除、二勤行、三学問」という仏教的な教えのもと行われ、Lさんが子どもたちに寺院・養護施設(当時同一の建物だった)を掃除させていたことから始まった。朝6時に起床した後、掃除、ラジオ体操、「仏の子ども」合唱、住職のお話という一連の朝の流れがあつたようだ。

Lさんの息子である現住職のMさん、現施設長のNさんが子どもたちによく話しているという内容からも、受け継がれている仏教性が感じられる。Mさんは、C会の子どもたちに集会など

で話をする際、「右手と左手を合わせて。右手は仏様、左手は自分です、私たちいつも一緒ですよ。親との生活、今ここでは一緒にできん(できない)けど、ご先祖様もお父さんもお母さんも、心の中ではいつも一緒ですよ、っていう気持ちで手合わせてね」と話していたという。Nさんは普段から子どもたちに、「ありがとうとちゃんと挨拶する、だからここでも、ご飯の前には手を合わせていただきます、食べ終わったらごちそうさま、これは仏教の教えであると同時に当たり前のことでしょ、人間として。」と教えていた。

以上のように、C会には仏教性が垣間見られた。これらの運営方針などが、利用者から人気を集めている可能性が考えられる。例えばC会保育園では、他学区からの入園もあるという。Nさんが保育園園長を務めた際、「日本一の保育園に」と志し、保育士を子どもたちから「～先生」ではなく「～ちゃん」と呼ばせるなど、独自の運営方法を実施した。以来この方針は継続されており、アットホームな雰囲気が感じられる。C会の仏教性と寄せられる人気との明確な関連性は明らかにできなかったが、C会の仏教性が人の距離感に現れていると考えられる。

c) 家族のような関係性と近年の希薄化

創設当初のC会の運営において、家族＝寺院＝C会という構造があったと捉えることができる。そもそも、創設当初のC会では、Lさんの里子と実の息子、養護児童が共同生活を送っていた。MさんおよびNさんは「(里子や養護児童と)兄弟のように育った」と当時を回想している。また、当初の運営従事者は、Lさん親族と、年長の子どもたち、卒業生などだった。Lさんの配偶者は「お給料なんてもらったことない」と話していたということから、C会の運営は、家事や子育てなどといった位置付けだったのではないかと考えられる。これらのことから、C会は寺族経営によって営まれてきており、C会内では職員や養護児童の中に家族的な関係性が強く存在したのだろうと推察される。

しかし、法人化や規模拡大による組織化、法整備の細分化などを経て、この家族的な関係性は、年々弱まりつつあると考えられる。Nさんによると、以前は、C会卒業生たちは同窓会を組織し、毎年の盆や正月にはC会に集まって雑魚寝をしていたが、現在は見られないという。この背景には、子どもが置かれている立場に変化があると、Nさんは指摘した。創設当初のC会には、戦災孤児もしくは親を持たない子どもが多く在籍し、「ここに根を生やして生活するという感覚」を持っていたが、現在の子どもの大半は、片親である場合や、家庭の経済的事情などで育てられないという状況にあり、これにより「来たくて来たわけじゃない」という意識があるだろうとNさんは推測している。この関係性の希薄化は、C会を取り巻く社会的変化による影響が大きいと考えられる。

C会は創立以来、大舎制^{注⑧}によって子どもの養護を続けてきたが、近年、厚生労働省より児童養護の在り方に大きな変化をもたらす方針^{注⑨}が示され、C会は大舎制を廃止せざるを得ない状況にある。Lさんから受け継がれる仏教性はC会において継承されづらい状況になるかもしれない。Nさんは、「大舎制という営みの中で培われてきた児童養護に関する経緯と知見をすべて捨ててしまうような論調には疑問を感じる」と述べつつ、時代に合った最善の児童養護ができるよう、慎重に議論を進めている。

(4) 事例：問題を抱える若者を預かっていた「寺院D」

浄土宗寺院「寺院D」において、元住職のOさんは、1990年代～2010年代後半の間、非行やひきこもりなどの問題を抱える若者を寺院にて無償で預かり更生させてきた。寺院での共同生活の他に、対面相談、電話や手紙相談など、様々な形で膨大な人数の若者と関わってきた。

0さんの活動は、インタビュー記事・書籍、テレビ番組など多くのメディアで取り上げられていることから、本研究では主に文献調査を行い、0さんの配偶者、息子、当時0さんと共同生活を送った若者の1人に対し、補足的なインタビュー調査を行った。

a) 心のつながりを求める若者

0さんの活動に影響を与えた、高校生時代のある出来事が書籍にて紹介されている。不良だった高校生時代の0さんが、傷害の現行犯で警察に逮捕されそうになっていたところに、担任の先生が駆け付け、土下座して謝罪してくれたそうだ。この出来事について0さんは各所で語っていることから、0さんにとって印象的な出来事だったことが分かる。0さんが活動を行うモチベーションの1つに、恩返しのような意識があるのではないかと考えられる。

上記の出来事後、0さんは心を入れ替えて勉学に励み、大学進学、就職を経て、事業家として活躍していたが、0さんの父が倒れたことを機に、僧侶の仕事に専念するようになった。0さんには当時(1980年代後半)、心のつながりが重要な時代になるという確信があったという。

若者を預かり始めたきっかけは、0さんの息子が通う高校においてPTA会長を勤めた際、不登校や退学する学生の多さに驚いたことだという。0さんが事件を起こした子どもの家庭を回ったところ、本人ではなく家庭の中に問題があると分かったそうだ。両親の離婚や経済的事情などの家庭的な問題があり、1人でコンビニ弁当や外食をしている学生が多かったという。そこで0さんは一緒に食事を共にしようと、若者たちを寺で預かるようになっていった。

シンナー中毒などの非行や不登校の若者が増えた時期にも活動を行っており、テレビやラジオ、雑誌などのメディアに取り上げられると、全国各地の若者、学校教員や警察官、親から依頼されることが増えた。0さんは、自身の電話番号を公開していたそうだ。0さんは、寺院Dにて全国から来た若者たちと共同生活を送る傍ら、相談があった全国各地の若者の元へ駆け付ける生活を送るようになった。若者が抱える問題を見聞きした場合には、学校の校長先生や警察、反社会的組織などに掛け合うこともあったようだ。これら全ての活動を無償で行っていた0さんには、自身の活動に対して大きな意義や責任感をじていたのだろう。

b) 活動に対する仏教的な動機

0さんは、問題を抱える若者を救うのは僧侶の仕事だと考えていた。これについて、全国の僧侶に対して警鐘を鳴らし、書籍や講演会で、若者たちの助けを求める声を伝えていた。一方で、現代において寺院や僧侶の活躍の場が減っていることについても言及しており、僧侶各々自らが実社会に対し、行動を起こすことの必要性について声を上げていた。

0さんは、僧侶の役割として若者の救済を呼びかけていたことから、筆者は、0さんの死後、活動を受け継ぐ僧侶がいるのではないかと考えた。0さん家族に対するインタビュー調査の結果、0さんの活動を受け継いでいる僧侶はいないことが分かった。0さんが行っていた活動は、0さん個人が持つ人徳や影響力、背景があったために可能だった活動であり、これを受け継ぐことは誰もできないという。また、「お坊さんじゃなくても(0さんはこの活動を)やってたんじゃないかな」と0さんの息子は語っている。0さんの活動に対するモチベーションは、僧侶としての使命感だけではなかった可能性が考えられる。0さんの人格を形成している、僧侶としての一面、過去に不良時代を経験した一面、事業家として活躍した一面、父親としての一面など、様々なものが影響していたのかもしれない。しかし、多くの宗教団体から講演会などに招かれていたことなどから、宗教者の模範として見られていたことは確かだろう。

c) 子どもに対して果たすべき家庭の役割とその実践

0さんは、核家族化により家庭の形が変化していくことや、「無縁社会」を危惧していた。特に、非行や心の病など、若者が抱える問題の背景には、本来あるべき家庭の支えがなくなってしまったことが影響しているという。0さんの関係者によると、「悪いことする子はみんな寂しいんだ」と0さんが語っていたことが明らかになった。

そこで0さんは、寺院Dで暮らす問題を抱えた若者に対して、本来家庭の中で父親が担うべき役割を実践していた。当時0さんと共同生活を送っていた若者の1人は、「子どもの精神的な土台には、お父さんの後ろ盾っていうのはすごく強いて(0さんは)言ってる。安定するっていうか、お父さんがいるから大丈夫っていう、それをおじさんが代わりにやるみたいない感じ。おじさんがいるから大丈夫ってなって、学校行けたりとか…」と語った。日常の食事も大切だと考えており、寺院Dには、「必ず全員で一緒に夕ご飯を食べること」というルールがあった。これは、寺院Dは施設ではなくひとつの大きな家族であると捉えているためだと0さんは記している。0さんを中心に寺院Dで共同生活を送る若者たちは、家庭のような心の支えを持ち、信頼関係を学び、安心して前に進めるようになるのだという。

4. 分析・考察

本研究では、現代において社会的活動を行う浄土宗僧侶のモチベーションを調査し、その役割を考察することで、宗教者がコミュニティ形成において中心的役割を担っているという仮説を検証するものである。まず、社会的活動を行う僧侶の活動に対するモチベーションについて振り返る。筆者は、活動のモチベーションが変容するプロセスを、活動創成期、活動過渡期、活動波及期に分けて整理を行った(図2参照)。

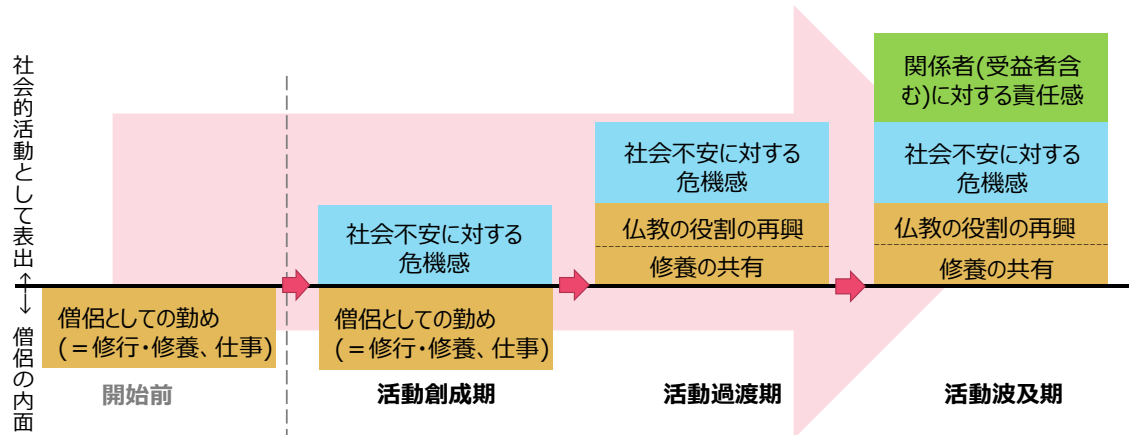


図2 社会的活動に対する僧侶のモチベーションの変化

出典：筆者のインタビュー調査ならびに文献調査を基に作成した。

なお、各モチベーションのボリュームについては考慮していない。

僧侶である調査対象者は、僧侶としての勤めを、修行や仕事と位置付けて実践してきたと考えられる。しかし、社会不安に対して危機感を感じる出来事や社会変容が生じたことで、これらの僧侶は、社会的な活動を起こすに至った(活動創成期)。実際に、各事例における活動のきっかけは、社会変容期に人々からニーズを受け取ったことによるものだった。今回取り上げた4つの事例では、僧侶という社会的立場の基盤があったことに加え、僧侶個人の思想などが、活動の開始を円滑にしたと考えられる。

活動過渡期では、社会的活動を修養の実践としてだけでなく、仏教の役割の再興にもなる僧侶は気づき、これが活動の継続や発展を推し進めるモチベーションになったと考えられる。社会における僧侶ないし宗教者の必要性を、社会で活動する僧侶が見出した瞬間である。

協働者や受益者などの関係者が広がっていった活動波及期では、その広がりに伴い、活動の代表者もしくは宗教者として、僧侶が関係者に対し活動の継続に大きな責任感を感じるようになったと考えられる。活動の継続や波及に対するモチベーションになったのではないだろうか。

また、本研究で取り上げた活動の広がりを考えてみる。関係者(共働者)の輪の広がり方は、事例ごとに大きさや構造が異なっているが、いずれの事例も、その中心には僧侶の存在が見られる。中心的な僧侶が果たしている役割としては、社会的活動の創成、団体の組織、活動関係者間における中心人物、人と人を繋げるコネクタ役、人が集うことのできる場所・機会の提供、家庭(家族)の支えのような役割、精神的なケアをする相談役、現代社会に対して警鐘を鳴らすなどが挙げられる。特に、社会的弱者や悩みを持つ人々が、宗教者という特有の立場の僧侶に対して、安心感を抱き、頼りやすさを感じているケースも見受けられた。僧侶の役割をより明確にするには、僧侶自身のモチベーションだけではなく、周囲からの評価や社会的評価についてさらに調査する必要があるため、今後の課題としたい。

稲場³⁾によると、宗教者はソーシャル・キャピタル^{注①)}としてのはたらきがあると論じている。現代の「無縁社会」はソーシャル・キャピタルの乏しい社会であるが、宗教者や宗教団体は、もともとその内部に信頼構造を備えているため、「人と人とのつながりを作りだし、コミュニティの基盤になっている」と指摘している。また、宗教社会学と呼ばれる学問分野では近年、欧米を中心に、宗教の役割に期待が寄せられており、ソーシャル・キャピタルとしての宗教に対する関心が高い。現在、キリスト教圏では、ホスピスやターミナルケアなどの医療現場において宗教者が活躍の場を広げており、宗教に対する人々からの信頼や期待が高いことが伺える。

本研究で取り上げた浄土宗僧侶による事例では、僧侶が設立に関わった社会的活動の関係者間において、僧侶が中心的な役割を果たしており、その活動の輪は閉鎖的なものではなく、波及性や発展性が見られた。なにより、各事例の僧侶たちは、実社会の人間関係に起因する問題点に目を向けており、僧侶が本来持っている人と人をつなぐ役割を果たそうとしていた。また、僧侶であったからこそ可能であった、精神的なケアを実践しているケースも見られた。

稲葉は、コミュニティを形成する上で、あらゆる宗教者が基盤となり人と人をつなげる中心的役割を担うことが可能だと述べている。本研究で取り上げた一部の僧侶のみならず、宗教者という特有の立場や背景、思想を持つ現代社会を生きる全ての宗教者に、人と人をつなぐ役割を果たすことができると筆者は考える。

付記

本稿は、筆頭著書の卒業研究(人間環境大学人間環境学部)における研究成果の一部である。

注

(1) ソーシャル・キャピタルとは、「個人間のつながり、つまり社会的ネットワーク、およびそこから生じる互酬性と信頼性の模範を指す」⁸⁾ 概念である。

(2) 「engaged Buddhism」は、「社会参加仏教」や「臨床仏教」などと日本語に訳される。

(3) 社会に対して宗教者が行う活動は、「社会事業」、「社会貢献活動」、「慈善事業」、「救済事

業」、「宗教ボランティア」などと呼ばれるが、本稿ではこれを総じて「社会的活動」とする。

(4) 大正デモクラシーの気運と共に、「社会事業宗」との評価が浄土宗に定着した⁹⁾。特に明治後期以降、浄土宗の社会的活動は活発化している。

(5) 『広辞苑第7版』によると、「修養」とは「精神を錬磨し、優れた人格を形成するようにつとめること」¹⁰⁾と記されている。「修行」とほぼ同義であるが「修行」より軽度なものを指しており、Kさんは、僧侶だけでなく一般の人とも共有できるのが「修養」であると語った。

(6) 母子生活支援施設とは、母子家庭の女性が子どもと一緒に入所し、生活と自立のための支援や相談を受ける施設を指す。1947年に児童福祉法により「母子寮」として定められ、1998年、「母子生活支援施設」に改称された。

(7) 虚弱児施設とは、身体の虚弱な児童に適正な環境を与えて、その健康増進を図ることを目的とする施設であったが、1997年になると、児童養護施設に統合された。

(8) 大舎制とは、児童養護施設の在り方のうち、1つの建物の中で子ども全員が暮らす在り方を呼ぶ。C会の場合、複数名(男女別)の相部屋と個室があり、食堂や体育ホール、トイレなどの生活設備を共用している。

(9) 2017年、厚生労働省は「新しい社会的養育ビジョン」を発表した。これは、社会的養護が必要な児童を「より家庭的な養育環境」によって養育するため、施設を小規模化し、里親やファミリーホームでの養育を推進していくことを示したものである。

引用文献

- 1) 橋爪大三郎『世界は宗教で動いてる』光文社、2013年、4頁
- 2) 文部科学省「全国社寺教会等宗教団体・教師・信者数((1)統計別)(2020年12月31現在)」『宗教統計調査』2021年12月10日掲載、(https://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa07/shuukyuu/1262852.htm) 2021年12月29日参照
- 3) 稲場圭信『利他主義と宗教』弘文堂、2011年
- 4) 小川有閑(西村明)「僧侶による“脱”社会活動—自死対策の現場から」『いま宗教に向き合う2—隠される宗教、顕れる宗教』岩波書店、2018年、126頁
- 5) 古群頼子・李青雅「路上生活者になる社会的背景とその決定要因の分析」『商学論纂』中央大学、2014年、96頁
- 6) 厚生労働省「ホームレスの実態に関する全国調査(生活実態調査)の調査結果(概要版)」2017年掲載(https://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-12003000-Shakaiengokyoku-Shakai-Chiikifukushika/01_homeless28_kekkagaiyou.pdf) 3頁、2022年3月13日参照
- 7) 西城宗隆(浄土宗大辞典編纂実行委員会)「明るく・正しく・仲よく」『新纂浄土宗大辞典』浄土宗、2016年、4-5頁
- 8) ロバート・D、パットナム(柴内健文)『孤独なボウリング—米国コミュニティの崩壊と再生』柏書房、2006年、14頁
- 9) 長谷川匡俊『近代浄土宗の社会事業—一人とその実践—』相川書房、1994年
- 10) 新村出『広辞苑第7版』岩波書店、2018年、1389頁
- 11) 田中ももの「社会的事業を行う僧侶のモチベーションに関する研究」人間環境大学、2022年

参考文献

- ・廣中邦充(松永多佳倫)『やんちゃ和尚』竹書房、2005年